学校教育とは何か

子どもたちは、どの子どもも自分をよりよく成長させたいと強くねがっている。また成長していくことに喜びを感じている。しかし子どもたちは、自分一人の力で成長していくことはできない。大人なり教師なりの助けを受け、力を借りることによって、はじめて自分の内部にあるものを、よりよく表に引き出すことができ、心をひらいて成長していくことができるのである。これは幼児や小学校の生徒ばかりでなく、中学校や高等学校の生徒においても同じである。自分を成長させたいと強くねがっている子どもたちが、自分を成長させることができないような不幸な状態におかれたとき、子どもたちは、不満を持ち、反抗的になったり乱暴になったりする。また劣等感を持ち、無気力になったり怠惰になったりする。

大人や社会や教師はそう考えなければならないことである。もともと無気力な子どもとか反抗的な子どもとか、怠惰な子どもとかが固定的にあるものではない。学校の授業についていけない子どもとか、音楽や体育のできない子どもとか、「おちこぼれ」などという子どもがあるものではない。そうなることをねがっている子どもなども一人もいるはずがない。そういう子どもを作っている大人とか社会とか学校とか教師とかに問題があると考えなくてはならないことである。

学校は、子どもたちが成長していくのを、子どもの学習をとおして手助けするところである。学習の主体者は子どもたちであるが、学習の主体者である子どもたちは、教師の適切な助けを借りることによって、確かに創造的に学ぶことができ、自分を生き生きと成長させ変化させていくことができるのである。学校においては、そういう仕事を授業とか行事とかのなかでしていくわけである。

子どもたちは、学校でのそういう授業や行事のなかで、教師や他の人間の力を借りながら、自分のなかに新しいものを作り出していくのである。自分一人だけでは

到達できないような高みにまで、自分の全分身をつかって、喜び勇んでよじのぼって行くようになるのである。

授業や行事の質

そういう授業の仕事は、追求的なものであり創造的なものである。単に一方的に教え込んだり、一つの形式に子どもをほめ込んだりするものではなく、教師と子ども、子どもと子ども、教師や子どもと教材との間に、つねに衝突があり葛藤があり、そのことによって新しい別のものがつくり出されていくようなものになっていなければならぬ。そういう衝突・葛藤があることによって、子どもたちは衝撃を受け、自分を純化し、自分を別のものにし、自分を高めへと移していくことができるのである。

そういう授業や行事は、教師が意図的に組織し構成することによって生れてくる。教材のなかにある本質とか方向とか問題点とかをとらえ、それをもとにして子どもたちに働きかけ、これに対して、子どもたちの出す発言とか行動とか反応とかの事実をみ、それらを組織し発展させていくことによって、はじめて可能になる。

そのように授業や行事を組織し構成するということは、どこまでも、一人一人の子どもたちの中にあるものを引き出し、それを相互に結びつけ、相互の力を使って発展させるためのものである。組織され構成された授業や行事の中で、子どもたちが、他に影響され触発されながら深く考え、自分を変えたり、自分を新しく作り出したりするためにあるものである。

したがって授業や行事を組織し構成するということは、そのこと自体が教師として子どもたちに働きかけをしていることであり、教師が子どもたちのなかにはいつていつていることである。すぐれた組織がされ構成がされた場合は、それだけでも子どもたち生き生きとなり、心をひらいて学習に参加するようになるのはそいつと

ころに基本がある。

しかし授業を組織し構成するということはそれだけではない。授業の組織とか構成とかは、具体的な教師としての手だてがあつてはじめてできることである。それは、授業の組織とか構成とかは、固定してあるのではなく、そのときどきの子どもとか教材とかの事実にしたがつて、またそこから生れた事実にしたがつて、絶えず流動し変化していかなければならないからである。

そのように流動的な組織がされ構成がされるのは、やはりそのときどきの教師のこまかな働きかけによつてである。授業が発展し展開するにしたがつて、子どもたちの出すそのときどきの事実には、具体的に直接的に発問をしたり、反駁をしたり、否定したり、拡大したり、他とつなげてやつたり、ときには教師が教えたり、豊かな話をしてやつたりするという、教師のたゆみない働きかけとか手入れとかによつて、授業は停滞することなく、流動的に発展していくものとなるのである。

そういう流動的な組織をし構成をしていくことによつて子どもたちは、そのなかで、それまでわかっていたと思つていたことが、実は少しもわかつてはいなかつたのだと思つたり、確かにわかつたと思つたり、自分のそれまで持っていた通俗的な考えや表現を否定し、その世界から、より高い別の世界へと抜け出していくのである。

そつなつたとき子どもたちは、ほんとうに心をひらいて明るくなるのであり、淨化された美しい姿になっていくのである。どんな努力でもして、課題を突破したり、よりよいものを獲得したりし、自分をより美しくしたり、クラスや学校全体のなかに、より美しいものをつくり出し、そのなかで自分もより高く成長したいとねがうよつになるのである。

授業とはそういうものであり、子どもたちが学校で学ぶということとはそういうことである。組織された授業や行事のなかで、絶えず新鮮な驚きを持ちながら、一つ

のものを追求し、課題を突破することによって、新しいものを自分のなかに獲得し自分をくり出していくことである。そういう作業のすじみちのなかで、また結果として、この世のなかには、自分たちの想像だにしない豊かな世界が無限にあることを知り、謙虚になったり、希望を持ったり、学ぶとはこんなに楽しいことかと思ったりしていくことである。

そういう学び方を体験したとき、子どもたちは素直になり、しなやかになり、それまでの自分の持っているものに固執することなく、目を輝かせて、よいものはどこからでも学びとるようになる。自分の持っている可能性を表に引き出されるから、自分を大切にするようにもなるし、同時に、自分に豊かなものを与えてくれる他のものをも大切にするようになる。

教師の資質

そういう仕事をしていく場合、授業者としての教師に必要なことは次のようなことである。

①教師の組織力、構成員力

学校教育の仕事、授業という仕事は、一人が一人を教えるのではなく、1対1の関係で成り立つものではない。1つの学級の中にいる何十人かの子ども、1つの学校の中にいる何百人かの子どもを、授業という事実によって組織し構成し、相互に交流し影響させ合わせることによって成立する。

従って教師に組織力・構成員力があるかないかによって、授業や行事の質は一変したものになってしまう。組織力があり構成員のある教師は、すべての子どもを生かしながら授業や行事を進展させ、そのなかで一人一人の子どもが育つのを見守り助けしていくが、組織力・構成員のない教師は、授業や行事が平板になり、むしろ逆に、子どもの成長を押さえついたり押しつぶしてしまったりすることが多い。

②教師の豊かな知識と感覚と表現力

授業や行事は、教師の働きかけや手入れによって出発し成立していくものである。教師のすぐれた働きかけや手入れがないかぎり、子どもたちは、どの子どもも、それまでの日常的な世界にとどまっているのであり、それまでの自分を捨てて、別の世界へと入り込み、自分を別の人間にしていくことなどできないのである。

そういう教師の働きかけとか手入れとかは、授業や行事においては、ほとんど教師の言語や身体での表現によってされていくものである。教師の言語とか身体表現とかによって直接に子どもに働きかけていくものである。子どもたちは、そういう教師の表現によって、触発されたり、深く考えたり、自分を変えていったりすることができるのである。

そういう教師の表現活動の背後にあり、また表現活動の内容となり力となっていくものは、教師の豊かな知識とか経験とかであり、また教師の持っているすぐれた感覚である。教師が豊かな知識とか経験とかを持っているとき、教師の表現は豊かで明確になり、子どもを豊かに楽しくしたり、子どもの内部にあるものを触発し、生き生きと表に出させるような力となる。また教師がすぐれた感覚を持っていることによって、子どもの表現のなかにあるものを見わけたり、他とつなげたり、さらに子どもの内部にあるものまで掘り出したりすることができるようになる。

③(教師の指導の技術、技能

教師は授業とか行事とかのなかで、目の前に具体的にいる子どもを対象にしながら、そこにある具体的な事実在即して、方法をつくり技術を使って、事実を動かしたり新しくしたりしていくという仕事をしている。したがって教師の仕事は、きわめて具体的であり直接的である。

しかも教師の仕事は、一人の教師が、さまざまな異質のものを持ち、そのときどきに変化していく何十人かの子どもを対象にして、子ども相互の関連をもみながら対処していかなければならない複雑な仕事である。それは医師が一人一人の患者の

事実即して具体的に処置していくのと同じであり、同時に何十人かを対象にし、組織し構成し、そのなかで一人一人に対処していかなければならないという点において、医師以上に複雑な仕事をしているということになる。

そういう意味で教師は専門職なのである。だれにでもできる仕事ではなく、組織力や構成力を持ち、知識や感覚や表現力を持った上に、直接に働きかけ手入れをするための、指導の技術や技能を持っていなければできない仕事である。

しかし教師の技術や技能は、単なる職人的なものだけではない。背後に教師の人間性とか教育観とか、子ども観とか、教材に対する考え方があり、それを内容としての技術や技能である。教師の技術や技能がそういう人間的なものを持ち内容を持ったとき、教師の技術や技能は生きて働くものとなり、子どものなかに豊かにはいっていくものとなる。そういう技術や技能がないことには、事実が豊かに確実に動くなどということはない。

教師の資質の形成

そうだとすると教師は、とうぜんのことであるが、専門家としての資質とか技術とかの訓練を十分に受け、また自ら訓練し、教師としての力量を十分に作り出しておかなければならないことである。力士が相撲の基礎技術を十分に学ぶのと同じであり、職人が道具の使い方を学ぶのと同じであり、医師が基礎医学を学ぶのと同じ、心音のきき方とか、手術の仕方とかを学ぶのと同じである。しかし現在の日本の教師は、そういう基礎訓練をどこでも受けると言うことがない。教員養成大学においても、基礎的に系統的に資質や技術の訓練をしているところはないし、また現場においても、そういうことをやる場所はないし指導者もない。これでは聴診器も使えず、手術の方法も知らない医師が患者に接し、無謀な治療をしているのと少しもかわりはない。

そう考えると今後は、大学においても、専門家としての教師の資質の形成のため

の仕事を実画的に系統的にしていくようにしなければならない。私も参加した宮城教育大学での教授学演習の仕事は、そういうことを願いとしての仕事であったが、今後は各大学でもそういう仕事をし、力を合わせて教授学演習でのカリキュラムをつくり出していく必要がある。現在、そういう動きがあるし、私もまたそのためにいくらか力を尽くしている。

大学でそういう仕事をした上で、なお医師のインターンと同じ制度ができればなおよい。教師に採用されてから三年ぐらいは、責任を持って教壇に立たせないで、現場のすぐれた教師につけ、すぐれた仕事を見習わせることである。すぐれた教師につき、すぐれた教師の仕事を見習わない限り、本当によい仕事は覚えられるものではない。しかし現在はそういう指導者がいるかどうかの問題がある。将来、何とんでもそういう指導者を作り出さなければならないことである。

しかし、教師の学習はそれだけで終わるということはない。教師は、責任を持って一学級もしくは教科を担当し、具体的な授業という場において事実に向かい、苦しんだりもがいたりしながら、小さくとも一つの事実を作り出したとき、はじめて学ぶことができ、自分を訓練することができるのである。教師としての力量を作り出していくことができるのである。

しかも教師は、そういう実践での学び方を、教師の仕事が終わるまでしつづけていかなければならないのである。教師の仕事は一生学ぶことであり、教育という仕事は、教師が常に事実から学び進歩することによって、子どもを学ばせ進歩させることができるからである。